

## 子どもと音楽について (H.29.1.19最終講義より)

富 田 英 也<sup>1</sup>

### ★子どもにとって音楽は必要か

音楽が必要かどうかを考えると、まず音楽の起源について述べなければならない。音楽の始まりは、人間が生物であることを意識した時からのものであり、音を感じるという機能は生物の進化の過程で発達したものであり、そして生物にとって音は生きるための環境である。いつ襲われるかわからないので、周りの音に敏感になる。さらに獲物を捕るときの合図の音や、何かを伝達するための音等々、人間が生活の手段として使っていた音から音楽が生まれてきたことが想像できる。働く人が伝えたいことが労働歌を聴けば理解できるし、民謡にはその地域の文化の特徴や悲しみ等も伝わってくる。

音の起源はカール・ビュッヒャーやチャールズ・ダーウィーン等の諸説（言語起源、労働とリズム、動物の求愛、動物の模倣、信号、魔術）があるが、近年クルト・ザックス（1881～1959独・比較音楽楽）の複合的な音楽の形成がきわめて有益な示唆に富む見解として考えられている。そしてこの説では、ロゴスとパトスがミックスしたところにメロディーが生まれると述べている。（ロゴス＝理性的な側面で音楽では音高とリズムや言葉、パトス＝感情的な側面で言葉を伴わない情動の揺れ）

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部教授

e-mail : [hide8-13@fc.hakuoh.ac.jp](mailto:hide8-13@fc.hakuoh.ac.jp)

人間の機能では、胎内で聴覚が一番初めに発達し、胎児は母親の心音や声さらに音楽を含む外部の音を聴いている。すなわち音楽との出会いはすでに生まれる以前から、聴くことによって始まっている。乳幼児期における脳などの神経組織の発達は著しく、環境からの影響を強く受ける時期である。そのような時期に質の良いすぐれた音楽と出会うことは、豊かな感情経験を積み、感性の発達を促進させるのである。

そして、中枢器官であるセンサーが環境に適合するように働きます。つまり子どもにとって良い環境が必要であり、心地よい環境とこの時期における音楽の出会いが重要である。したがって、この時期にどのような環境のもとで生活し、その環境とどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味を持つのである。また、音楽は音による魂の表現であり、人から人へのメッセージとなるのである。

コダーイ・ゾルタン（ハンガリーの音楽教育者）は、音楽教育は誕生前9ヶ月から始めるべきだと述べている。

音楽は音によって構成された小宇宙であり、大切なことは、音楽は何よりも音によって人間を高めることが出来ることである。そしてすべての人に新しい劇的体験をもたらすことが出来、瞬間瞬間を精いっぱい生きる幼児・児童にとって美を追求する音楽は何よりもふさわしいものと考えられる。

以上のことから子どもにとって音楽は必要であると考えられる。

## ★子どもの音楽ってどんなものか

子どもはリズムカルな音楽を聴くと自然に体が動いていることが多い。これは子どもが直感的に音楽を聴いていたたり、自分の好きなように音楽を感じている結果なので、きこえてくる音楽は子どもにとって楽しく、ま

た、自由にワクワクするようなものでなくてはならないと、ジェロム・ブルーナー（アメリカ教育心理学者1915.10.1～）は述べている。

聴くことは大切であるが、音の大きさや高さといった音の物理的な差異を識別したりすることが重要ではなく、「聴くこと」によって子どもが感じた内なるものが大切である。それは、表現活動の中で子どもは、彼らの内面に記憶された様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み合わせながら、想像の世界を行き来することを楽しんでいるからである。このことから想像の世界を構築するプロセスに「音」の感受が介在しているといえる。

さまざまな音や、複雑な響きを経験しながら、子どもは音のインプットを増やしている。そのインプットが増えるにつれて連想の場面も増えていく、その増大を受けて想像の世界は豊かになる。それは音楽の活動をしていることだけに存在することではなく、絵画を見たり、物語を聴いたり、あるいは体を動かしている中で、それぞれの子どもの固有な感性を働かせ、かならずしもその場に存在しない「音」も感じ取っている。

子どもは、多様なインプットの体験を積み重ねることで、音の表現に関して総合的な判断を行うようになり、それが「感性」の育成につながっていくと考えられる。

音楽を聴いて子どもは自由な発想でイメージし、ワクワクとした世界を夢のように体験できることが、子どもの音楽となる。

## ★子どもの音楽環境について

環境は、大まかに物的環境と人的環境の二つに分かれる。この人的環境によって音楽環境が影響する。母親や親族を含めた保育者の感性、考え、姿勢などが子どもに及ぼす影響は多大であり、子どもとともに音楽を楽しむ

む姿勢がなければ、子どもの表現としての音楽性を育てることはできない。保育者は、幼児に対するさまざまな配慮をふまえて環境を設定する必要がある。

①物的環境－社会環境、自然環境、園の設備、部屋の構造、教材、玩具、素材など

……視覚的にはっきりとらえられるもの

－音や風、匂い

……見えないが、聴覚、触角、嗅覚など五感を通して感じるもの

②心理的（人的）環境－主として人間関係（親・保護者・友達など）、雰囲気など

環境は物理的環境と心理的環境が一体化し、相互に関連しながら生活体に影響を与えている。このほかにも時間的空間的要素も含まれている。したがって、保育環境と子どもたちが影響を受け、主体的に取り組むすべての環境を包含するものとなる。

\* 量について考えると、音楽を絶えず聞かされると、人は無意識に音楽の聞き方を変えてしまう。「外的刺激の減少が内的活動としてのイメージを活発にさせる」といわれている。このことは、多すぎる音楽環境は、音楽的イメージの形成にはマイナスになる。静かな状態は、幼児にかすかな音や静かな音を聞く姿勢をつくる。音楽に満ち溢れる環境は、耳を純化させる。また、絶えず音の鳴っている状態に置かれると、人は自分に必要な音だけを拾って聞くようになる。たとえば、話し声が響く騒音の中から、先生の声（音楽）を聞くということが可能になってしまう。これが極端になっていくと、人の話をまともに向かって聞くということができなくなる。すなわち、音楽行動と無関係な行動を並行させることができるようになっていくのである。

\* 音楽の種類について考えると、現代の日本の音楽現象で特筆すべきなのは、音楽機械の進歩とともに多すぎる種類の音楽が聞かれるようになったことである。西洋クラシック、ポピュラー、ジャズ、日本の伝統音楽等々である。このことは、個人の音楽の指向や価値観を多様化させると同時に、一方では、自分の音楽を強烈に求めるということをしなくなってしまうという現象が生まれた。音楽に限らず何においてもそうであるが、人が欲する以上に豊富に与えられているとありがたみが減ってしまうものである。

\* 質については、日常・生活の中でどのような質の音楽を子どもが聞いているかということで、大変重要である。注意したいのは、現代は人間でなく機械が作りだす音楽で満ち溢れ、高度に進歩した音響機器により、だれでも手軽にいつでもどこでも音楽が聴けるようになり、音楽と人間との関わり方を変えてしまった。

人間が作りだす生・アコースティックな音楽が必要となる。人間が作りだす音楽とは、本来、伸びたり縮んだりする生き物になり、機械では決して作りだせないものである。一回ごとに異なるリズムの伸び縮み、生きた音楽にこそ人間の心に情感を訴えることができるのである。それが伝わったとき、子どもたちは保育者と同じ心を味わうことができ、このように音楽を楽しむことの共有が始まるのである。

生後6週の母子相互作用の分析を通してマロックとトレヴァーセン (Malloch & Trevarthen, 2009 Communicative Musicality) は、人は間主観的に他者と通じ合う基盤をもって生まれており、その間主観的な関係を支えるものが音楽性だと述べている。つまり人は生まれながらに、他者との間で感情や何らかの意味内容を音声や身体を介して瞬時に共有することが出来る生き物であり、これを支える根底には音楽の営みが含まれるということである。

また、人間と環境音の関係では＝マリー・シェーファー（サウンドエデュケーション）、ジョン・ケージ（4分33秒）、武満徹に共通する見解で現代人は耳の感受性が衰え聴くことを怠っていると述べている。

ここまで述べたように音楽について考えると、子どもが「音楽とかかわる」という活動が大きな意味を持ち、いろいろな面から配慮しなければならないことが伺える。「無意識」に聴いている音楽でも、聞く活動として大きな意味を持ち、それが習慣づけられていくとやがては「意識」をして聞くことに進んでいく。初めはつまらないと思っていた音楽も、何度か聞いているうちに、今まで聞こえていなかった楽器が聞こえてきたり、メロディーなどが鮮明になってくるにしたがって、その音楽に興味がわいてくるものである。そして楽しく音楽を聞くことのできる子ども、音楽に親しみを持ちながら成長していく子どもになっていくのではないかと考えるのである。

## ★子どもの音楽はどんなものがあるか

子どもが自ら子どもの音楽を作っているのではなく、かつて子どもだった大人が子どもの頃を思い出し、子どもの気持ちになって夢や憧れ、冒険や人形などへの慈しみ、ごっこ遊び等々大人の作曲家が作っている。音楽を聴いてみると本当に子どもの楽しさや、うきうきした心情をもった作曲家であることが理解できる。

次に子どものために作られた代表的な曲を挙げる

◆カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921仏）：組曲「動物の謝肉祭」、子ども向け管弦楽曲の代表作①「序奏と獅子王の行進曲」②「雌鶏と雄鶏」③「驪馬」④「亀」⑤「象」⑥「カンガルー」⑦「水族館」⑧「耳の長い登場人物」⑨「森の奥のカッコウ」⑩「大きな鳥籠」⑪「ピアニスト」⑫「化石」⑬「白鳥」⑭「終曲」

◆プロコフィエフ(1891～1953露)：交響的物語「ピーターと狼」ナレーターと小オーケストラ

◆チャイコフスキー(1840～1893露)：「子どものアルバム」①朝の祈り②冬の朝③木馬に乗って④ママ⑤木の兵隊の更新⑥病気の人形⑦人形の葬式⑧ワルツ⑨新しい人形⑩マズルカ⑪ロシアの歌⑫農夫がガルモニアを弾く⑬カマリンスカヤ⑭ポルカ⑮イタリアの風に⑯フランスの古い歌⑰ドイツの歌⑱ナポリの歌⑲乳母のお話⑳バーバ・ヤーガ㉑甘い夢㉒ひばりの歌㉓辻音楽師の歌㉔教会で

◆シューマン(1810～1856独)：「子どもの情景」①見知らぬ国と人々について②不思議なお話③鬼ごっこ④おねだり⑤十分に幸せ⑥重大な出来事⑦トロイメライ⑧暖炉のそばで⑨木馬の騎士⑩むきになって⑪怖がらせ⑫眠りに入る子供⑬詩人は語る、「子どものためのアルバム」60曲から成る

◆ドビュッシー(1862～1918仏)：「子どもの領分」①グラドゥス・アド・パルナッスム博士②象の子守歌③人形へのセレナード④雪が躍っている⑤小さな羊飼⑥ゴリウォーグのケーキウォーク⑦夢想⑧スケッチブックより⑨英雄の子守歌⑩舞曲⑪マズルカ⑫ノクチュルヌ⑬小さな黒ん坊⑭コンクールの小品⑮レントよりおそく

◆ハチャトゥリアン(1903～1978露)：「少年時代の画集」、子どものためのアルバム第1集第2集

◆エイトル・ヴィラ＝ロボス(1887～1959ブラジル) 南米の作曲者：「こどものためのピアノ曲集」〈かわいい子どもたち〉①右手にバラを持って②お母さんはこのように子守歌を歌ってくれた③貧しい小さいいなか娘④小さい白いドレス⑤サッカー⑥いなか者の物語、〈輪になって遊ぼう〉⑦君の小さな足をうしろに引いて⑧腰のふくらんだ小さなスカート⑨三人の騎士⑩一羽・二羽・ほろほろ鳥⑪ガリバルディがミサに行った⑫みんなでダンスに行こう

おとぎ話①おとぎの国の宮殿にて②王子さまのごあいさつ③小さな羊飼いの歌④王女さまの踊り、他に「子どもの組曲第1集・第2集」「子供の謝

## 肉祭

- ◆ニコライ・カルロヴッチ・メトネル（1880～1951露）：おとぎ話
- ◆ドミトリー・カバレフスキー：「こどものためのピアノ小品集」、「子どもピアノ名曲集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「子供のための35のやさしい小品集」、「子供のための組曲」、「子供のための6つの小品集」
- ◆ウィリアム・ギロック（1917～1993米）：数々のピアノ作品をのこしているが、自然な美しさ、心のやさしさ、強さ、悲しみなどが表情豊かに描かれているので、現在では世界中の人に愛されている、数々の叙情小曲集、「こどものためのアルバム」

## バロックから古典派

- ◆バッハヘルベル：カノン、◆バッハ：G線上のアリア、◆ヘンデル：水上の音楽、◆ハイドン：交響曲第94番「驚愕」、◆ゴッセック：ガボット、◆モーツァルト：アイネクライネナハトムジーク、おもちゃのシンホニー
- ◆ベートーベン：トルコ行進曲

## ロマン派以降

- ◆シューベルト：ピアノ五重奏曲「ます」、◆ショパン：子犬のワルツ・別れの曲、◆J.シュトラウス：美しく青きドナウ・春の声、◆ブラームス：ハンガリー舞曲第5番◆ビゼー：組曲アルルの女よりメヌエット・ファランドール、◆チャイコフスキー：くるみ割り人形・白鳥の湖、◆ドボルザーク：ユモレスク、◆デュカス：魔法使いの弟子◆ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ、◆レスピーギ：ローマの松、◆コダーイ：ハリーヤーノッシュより「ウィーンの音楽時計」、◆ハチャトゥリアン：ガイエヌより剣の舞、◆ムソルグスキー：展覧会の絵よりプロムナード◆グリーグ：ペールギュント組曲、◆デュカス：魔法使いの弟子、◆ホルスト：惑星より木星、◆武満徹：雨の樹



幼児・低学年向き、

◆ミヒアエリス：森のかじや、◆ボルディーニ：「踊る人形」◆プライアー：口笛吹と子犬、◆イエッセル：おもちゃの兵隊、◆ヨナーソン：カッコーワルツ、◆アンダソン：シンコペイテッド・クロック、おどるこねこ、そりすべり◆ミーチャム：アメリカンパトロール、◆ロッシーニ：ウィリアムテル序曲、◆ヨゼフ・シュトラウス：かじやのポルカ

以上、一例をあげたが子どもに聴かせたい音楽はたくさんある。選曲は教育者の価値観や児童とのかかわりの中で、聴かせたいと思う音楽に親しみその出会いを大切にすることである。子どもの反応は積極的ではなく表面的な反応を示さない場合もあり、微妙な反応を見落とさず気長に観察することである。無理強いせずに関心が高まるように、音楽に合わせて体をゆすったり鼻歌を歌ったりして興味を持たせることである。

1998年以降学習指導要領で鑑賞の共通教材の指定がなくなった。これにより教師は多様な音楽から子どもに適した教材を選択することが求められるようになった。自由度が広がったけれども発達段階などを考えてその子にあった音楽を与えなければならない。

子どもの発見者として有名なジャンジャック・ルソー(仏、思想家)は、「大人といえど子どもの気持ちを持っていなければ真に幸福とは言えない」と述べているが、私も同感であり益々子どもに戻ってあそびてみたい気持ちでいっぱいである。

最後になりますが、授業を受けてくれた学生や卒業生の活躍と、お世話になった教職員の皆様のご健康とご多幸を祈り、白鷗大学の益々の発展を祈念いたします。

【参考・引用文献】

- 「子どもと音楽 第1巻 音楽教育の目的と展望」浜野正雄・他著 1987 同盟舎
- 「子どもの音感受の世界」吉永早苗著 無藤隆監修 2016 萌文書林
- 武満徹「音・ことば・イメージ」小沼純一著 1992 青土社
- 「音楽表現の理論と実際」吉良武志・他著 2006 音楽之友社
- 「絆の音楽性：つながりの基盤を求めて」マロック、トレヴァーセン編著、根ヶ山光一・今川恭子監訳 2018 音楽之友社